

◎議長（佐藤平一郎君）

次、2番与口登美夫君。

〔2番与口登美夫君登壇〕

◎2番（与口登美夫君）

ただいま紹介にあずかりました若葉会の与口でございます。たいへん、器がよくなれば中身もよくなると思ひまして、たいへん、きょうの議員は静かでありまして、私も、いささか緊張している次第であります。

ところで、午前中から市民の合意の上に立った政治ということで、市長が盛んに強調されておったわけですが、歴代市長をながめまして、確かに市民感情やいろいろな面においての市民に対する対話というものは、比較的りっぱな市長のほうだろうというふうに私は感じておるわけです。しかし、私は、議会との対話が足りないのではないかということを常々感じておるわけでありまして。と申しますのは、私がこれから幾つか例をあげる中に、多少、そういう面、誤解を受ける面が、ときとしてあるということでありまして。お互いに、少ない費用で選ばれた同士であります。市民のために相協力して、市発展をさらに盛り上げるということをお互いにやってゆかなければならない立場である。ひよわいトゲでありますけれども、たまたま批判というふうに市長はとられますけれども、そういうものを、われわれはトゲとは感じておらないわけでありまして。愛のムチをお互いに市長とともに交換し合っていくんだというふうに感じているわけでありまして。そういう意味で、どうか、議員のほうをこわがらないで、時々、交換をしていただきたいと私は望むわけでありまして。

と申しますのは、先ほど、旧庁舎のいろいろな入札の問題におけるトラブル、あるいはまた、最近、10月1日付で日刊工業に発表されておりました原子力発電所の建設等について、いろいろ私は感ずる点があるわけでありまして。後ほど旧庁舎、旧庁舎の点については触れる議員がおられるようでありますので、省きまして、たとえば、原子力発電について、われわれは原子力発電所の誘致は、これからの、将来、石炭、石油、あらゆる地球上の燃料について、100年の寿命である。あるいはこのまま産業が発達した場合においては50年しかもたないというような中であって、原子力発電所は重要なエネルギー源として、われわれは開発をする義務というものが、われわれのあとに続く人類に対して、われわれは責任を持っているというふうに考えております。原子力を正しく理解し、安全に平和利用に供することが大事な問題だと思ひます。こういうような状況から、さきの議会でわれわれは、はたして、いまの日本の技術陣の水準で、建築が、安全が、公害が、はたして保障されているかどうかということを研究するために委員会を設けました。そういう中で、市長がこれから実施しようとするということについて、われわれが市長の諮問機関として十分な役割を果たすために出発をいたしました。しかし、残念ながら、現在の委員会では、まだ、そこまで勉強は到達しておりません。討論をかわす段階までいっておりません。勉強をやっておる段階であります。

しかし、過日の新聞では、日刊工業の1日付では、堂々と、市が正式に東京電力に誘致について交渉をし、東京電力もこれを受け、当地に常務、重役がまいり、用

地買収にまで手をつけ始めているというふうに出ております。そこまで市長が事を進展させておるならば、当市に委員会を設けたというものの意義について、多少、委員会等に相談があってもいいのではないかとというふうに考えます。

また、この新聞には、田中代議士等を通じ県知事にも十分緊密な連絡をとり、かなりのところにいっておるというふうに、かなり長い文章で報道されております。もし、研究委員会に諮問をしなくとも、これだけのところまで進展させることができるというのであれば、現状、市長においてはかなり勉強が進み、安全、公害等については十分研究し尽されて、われわれに対して答弁できるほど進んでいるものと私は解釈するわけです。そうであるならば、先頭に立って、そういうものをまた全般にPRをすべきだと思うのであります。いま、いろいろ反対運動とか、そういうものがあるけれども、それほどまでに、わかなくても、私は、このことはやっていけるものというふうに考えておるわけです。しかし、いずれにしろ、新聞の方々もおりますけれども、たまには報道に間違いがあることもございますから、この新聞についてお間違いがあるのかどうか。その真偽のほどをお聞かせ願いたいということが第1点であります。

それから、次に、鉄工業団地育成と適地について申し上げたいというふうに思うわけであります。現在、日本の経済はイザナギ景気と一般に呼ばれるほどの好況を呈しております。しかし日本の経済は、こういう好況の中にあっても、裏に、常に恐怖を持っておるわけであります。すなわち、現在における恐怖は、自由化であります。貿易の自由化は、すでに一部品目を残すのみで、ほとんど自由化されております。また資本についても、かなり自由化が進展している段階であります。先般来の新聞を見てもわかるように、株価がかなりつり上がっておるという要因も、外地でかなり株が買われておるというような状況で、日本の産業界も、まさに国際的になりつつある状況であります。しかし、実際、日本の製品は、外国製品に比べてコスト高であります。こういう意味では、将来、国際競争の激しい中で、競争については日本の企業はまさに危いと思うのであります。そういう事態に対処するために、産業の再編成ということが盛んに叫ばれ、大企業の大型合併ということがやられておるわけであります。こういう中で、そういう大型設備投資によるコスト・ダウンが活発になり、時流に遅れないということで、一生懸命、業界がやっておることは、皆さん、ご承知のとおりであります。

柏崎も理研、内田、ウオシントン、あるいは小松というような協力工場を中心とする、かなりの中小の生産工場というものがあります。こういう中で、やはり中央の波を受けて、最近、団地育成ということは、ご承知のとおり、業務の内容の合理化とか、あるいは技術革新をはかるため、あるいは自由な郊外に進出して公害を起こさないようにということで、団地形成というものが進められております。したがって、それらの努力というものは、大企業でさえ、これだけの努力をしている現状、やむを得ない。国内競争に勝つためには、集団による合理化、技術革新、あるいは魅力ある厚生施設等を合理化によってやらなければ、生き抜くことができないということは、われわれも承知しておりますし、各中小企業の団地形成は大いに歓迎をするものであります。

しかし、先ほど申し上げましたように、この団地を形成する場合、最も、われわれが注意し取り上げなければならない問題は、公害だと思います。大きくなればなるほど、そういう問題が出てまいります。産業人の社会的経営責任に立って、その良心により、そういう問題を起こさないようにする努力が1つ。いま1つは、市長を中心とする政治家の都市計画の指導によるものだと思います。最近、田塚に団地が成功し、非常にわれわれは、先ほどから申し上げておりますように、歓迎をいたしておるわけでありましてけれども、北斗団地に、あるいは工場アパートにと散在しておる中で、さらに最近のうわさでは、明春、臨海工業団地、いわゆる安政町に団地ができることを聞いております。しかも商業高校の近くにできるということ。はたして公害が、あるいは学園に及ぼす影響がないものかどうか。騒音というもの、あるいはその他、十分検討し尽されたのかどうか。都市計画についても、さきに、りっぱな団地をつくりながら、なぜ、1カ所に集めるだけの政治生命をかけることが市長としてできなかったのか。これら、将来、団地をつくる場合、もっとお互いに、自由主義の国であっても、そこに良心と政治の力で、何らか解決ができるものと思います。しかし、現状の安政町の団地についても、十分、そういう迷惑がかからないということをやっていると私は判断をしておりますけれども、一応、そういうことが1つあります。

次に、柳橋踏切その後の進展であります。先ほど、午前中、若干、だれかの質問もありましたが、軽く答弁が終わっておるようであります。また先般、若葉会の渡辺議員の質問によっても、かなりこまかく説明されておりましたので、私は、こまかくは省きますけれども、近く黒姫村が合併する中で、ますます枇杷島の踏切については、説明するまでもなく、重要性が、私は増してゆくと思います。そして、その重要性に対して、市長の午前中の答弁は、あまりにも、かなりに進んでいるという一言の答弁では、あまりにも責任がなさ過ぎるのではなかろうか。最近の産業の発展から、非常に列車は増加の一途をたどっております。本年10月1日から13本のダイヤがまたふえました。明年においては、さらに、それよりふえるという報告が入っております。ましてや、46年度に複線になるや、非常にダイヤは過密になること必至であります。46年度以降においては、ほとんど、あそこは、昼間、まともに通過することができないだろうとまで言われております。そういう中で、市長のあれに対する熱意というものが、あまりにも薄いのではないか。それくらい困ってくれば、やがて困ったほうが泣いて、泣きついてきたときにやってやろう。そういうようなものが本当の政治姿勢だろうか。私は若干、憤りを感じざるわけであります。

県内に目を転じた場合に、先般、ことしの春、私も渡ってまいりましたけれども、三条の大崎。柏崎ほど重要性を増しておると思われぬのに、りっぱな陸橋が駅の脇にできております。そして、東西を結び、あの三条の西と東を結びつけております。柏崎においても、黒姫だけでなく、あの裏に存在する枇杷島から田中に対する一帯は、まさに結ばなければならない現状に来ておると思うのであります。こういう中から見た場合に、他市を見た場合に、さらに小出、あるいは坂町、あるいは、もう1カ所、加茂、この辺はもうすでに青写真は完成し、近日中に着工にまで

いこうというまで話が進んでいる現状の中で、当市が県下一困る踏切でありながら、そこまでいかないというのは、事情はどうか。私は、ほんとうに残念に思う次第であります。

次に、無雪道路の確保について。

裏日本の過疎の原因は、まさに私は雪害にあると言って、ほとんどだと私は思います。われわれ裏日本の住民にとって、雪との戦いに勝つことが、すなわち裏日本の発展の根本をなすものというふうに考えております。これの成否こそ、裏日本の政治家に課せられた使命であるというふうに考えております。特に、その中における無雪道路の悲願は、多年の夢であり、またわれわれ産業人にとっても死活の問題であります。かなり、大企業の進出等についても、冬の雪害をもって進出をして来ないわけであります。したがって、この解決こそ、市長の最も大切な仕事になるかと思えます。昨年、いろいろ、少ない機械力の中で、関係職員が大いに努力をしたことは認めます。しかし、努力したからということだけで政治というものは万全を期したということはできないのであります。努力が実るような態勢、いわゆるバック・グラウンドをつくってゆかなければ、ほんとうの政治とは考えません。そういう意味で、冬の柏崎の現状は、雪に対するバック・グラウンドがきわめて私は貧弱であると考えております。そういう意味で、今冬については市長はどのような考えを持っておられるか、一言お聞きしたいと思うのであります。

最後に、アメリカシロヒトリの駆除対策と姿勢について、虫一匹ぐらいのことについて、赤いじゅうたんを敷いた議場でしゃべることもないだろうという人もあらうかと思えますけれども、先般、私は、議長と私と武田議員とソビエトを視察してまいりました。かの地においての市内の美しさについては、ほんとうに、ことばでは言いあらわせないくらい、りっぱなものであります。道路といい、公園といい、また建築物のりっぱなことは、日本の比ではありません。そういう美しさは、かねての公德心、あるいは社会道徳という背景があつてなされるということは、私も承知をしてまいりました。しかし、それだけではない。常に緑というものをふんだんに町の中に取り入れながら、それを大切に育てようという気構えが、私は随所に見ることができました。町を美しくすることは、市民の心持ちを安らげたり、あるいは子供の情操教育にもなったり、たいへん、教育上についてもアレですし、大切なことだと思えます。そういう意味で、近年、市内において、あのアメリカシロヒトリの猛威を、その跳りようを許したということは、もし、かの地でこういうことが起きたならば、もちろん、「アメリカ」という名前だけでかの地はきれいですけれども、そういうことでなくて、こういうものに対しては、ほんとうに真剣に取り組むだろうと思えます。

そういう意味で、市長は虫一匹と言わず、まさに、かなりの大群をなして柏崎の空を跳りようしている現在、明年度については、かなりしっかりした対策をとっていただかなければ、見るもむざんに柏崎は坊主にされ、家々は裸にされる。せいぜい、裸になってりっぱに見えるのはこの庁舎ぐらいのもので、あとは、さらけ出しても、あまりりっぱなものはないように思いますが、市長に一言……。

かなり、きついことも言いましたけれども、前段、お断わりしましたように、愛

のムチでございますので、ご了承願いたいと思います。

◎議長（佐藤平一郎君）

小林市長。

〔市長小林治助君登壇〕

◎市長（小林治助君）

2番議員さんにお答え申し上げます。まことに肯けいに値するご意見等たくさんございましたし今後もぜひ、どしどし愛のムチ等を加えていただいて、ともどもに市勢の開発進展に寄与してまいりたいと思っております。どうぞよろしく。私も齒に衣を着せないで申し上げます。

議会との対話の欠除という点でご注意がございました。この辺は十分ひとつ、できるだけ対話を保つようにやってまいりたいと思います。また議員の皆さんも、同志諸君でございます。どうかひとつ遠慮なしに、皆さんのほうからも私に対話を申し込んでいただくようお願い申し上げます。私は元来、こういう性格でございます、何でも洗いざらいさらけ出してお話を申し上げる。こういう性分でございます。どうか、その点はよろしくお願い申し上げます。

先ほど、実は、私も昨日の日刊工業新聞を拝見いたしまして、これはおかしいと思って、いろいろ内容を読んでいるうちに、新潟の日刊工業の記者の方から電話がございまして、本日の日刊工業新聞の記事は本社の記事だ。だいぶ話が柏崎では進んでいるようだが、市長さん、どんな程度ですか。こういうお尋ねでございます。私のほうから日刊工業に実は電話をしようと思っておった。あの記事を拝見いたしました、与口さんがおっしゃいましたように、用地買収に着手している。あるいは田中角栄先生も県も働きかけをやっておる。まあ、いろいろと具体的な記事がのっておるわけでございます。それで、真実は……私は、それが真実であるならば、何も申さないわけです。まだ全然そこまでいっていないのに、新聞だけが何だか柏崎は進んでいるようなことを言っているのです、おかしいじゃありませんか。こう私は申し上げた。あれはどこから記事が出たんだろうと、こう言っておりました。そんなようなことでありまして、先ほど与口さんも、時に新聞といえども、まあ実態と違う場合もあるのだというようなお話もございましたが、そういう点で、皆さんから誤解のないようお願い申し上げておきたいと思っております。

私は、こうした原子力エネルギーの問題等については、議長さんにもいろいろお話をしているんですけれども、このあたりは、やはり大きな仕事でございます。県がけん引力になってやるべき仕事ではなかろうかと思っております。あの記事の中で、小林市長が上京して小松常務に会ったということ、これは事実でございます。8月30日でございますでしょうか。私は東京電力を訪問いたしまして、小松さんに会っております。それは一体、今後の原子力発電というものについて東電はどのようなお考えをなされているのか、意向を聞きに行ったのでございます。もちろん、この場合、小松さんの話ですが、いや、東電だけでも年々120万キロワットぐらい需要がふえるというのです。それで、あなたがおっしゃるように、今後エネルギー開発は、もう石炭、石油という時代は過ぎて、やはり、こうした、無限と考えられるところの、こういうエネルギー源の開発が必要になってまいります。こういう、



まあ、ことでございました。そうでございますか。まあ私どももいろいろこの問題については検討をいたしておりますことと、いま1つは、私どもは東北配電の管下でございます。まあ、皆さんのご意向を聞いたり、その上で東北配電さんにもいろいろご意向等を聞く必要があろうかと思って、私はお伺いをいたしました。このように申し上げておったわけでありまして。たまたま、そのときに小松さんから、実は、山田取締役と申されましたか、その辺、記憶がはっきりいたしません、これは日刊工業にもそういうことが書いてありました。現地を一応見ている。見てきたというような、私と入れ違いに向こうを見に行っているというようなお話は承っておりました。いずれにいたしましても、こういう問題については、私ども、せっかく議会の皆さんからも特別研究委員会をおつくりいただいて、中間報告も実はいただいております。

私どもは、まだ不勉強でございます。議会の皆さんよりも調査研究が遅れているようでございます。しかし、これは一心同体でございますので、議会の皆さんからいろいろご調査いただいたものを私どもにお聞かせいただくことも、合理的な方法ではなかろうか。少し、おんぶしているということで恐縮はいたしております。しかし、われわれは、先ほどのお話のように、こうしたものに対する、いろいろと心配されますところの公害の問題、これらの問題については十分ひとつ解明を、解説を……専門家の解説を聞きながら、理解を得るようにしていきたいものだ、こう思っております。まだPRの段階だと思います。そしてまた、それに対してご意見があるならば、どこそこにある。こういうことを調べて来ようじゃないかというようなことも、皆さんからもご検討をいただきたい、こう私は思っております。私自身は、科学に対しては非常に弱いのでございます。まして、原子力発電等について、これがどうこうというようなことは、自分自身で判断するわけにはまいりません。ただ、われわれが信頼できる機関、そういう学者、それらのお話を聞いて、そして判断することになろうかと思うのでございます。県でも近いうちに高井亮太郎先生ですか、こういう方を招へいして、できるだけ県内の皆さんからも聞いてもらって、そして勉強してほしいというような気持ちでお願いするようでございます。

そういう点で、私は、この問題に対して、こういう記事が出ているのに議会に話をしないのは対話が欠けているじゃないか、こうおっしゃる。事実がそうであるならば、そうございましょうけれども、いま申し上げましたように、事実は全く違っておりますので、その点は、この機会にお話を申し上げておきたいと思っております。また県のほうも、ああいう記事を出されたのでは、県が何か、つんぼさじきに置かれているようで……県がむしろ中心になってやるべきなのに、柏崎が独走しているみたいな、そういう誤解があってもいけません。県会で質問があっても、知事はポカンとされると思います。そういうことで、きのう、担当の係長に早速電話を入れて、そうではないんだと……きのうは知事がおられなかったものですから、担当の方に事実をお話申し上げておったわけでございます。そういう点でご了承をいただきたいと思います。

それから、例の安政町の工業団地造成の問題でございます。先ほども校長さんや

PTAの方々が陳情にまいりましたが、私、その前にも陳情を受けておりまして、いろいろお話申し上げておるつもりでございますが、大体、悪田のあの地域一帯の工業団地につきましては、かねて通産省の適地調査の中で工業適地というふうに指定を受けておる地域でございます。都市計画審議会でもご答申をいただいて、あそこに地域制が設けられて、道路の外側は準工業地域になっておる所でございます。しかし、たまたま、昭和35年に商業高校の用地買収が決定されました。そこで、あそこに学校ができるならば、道路に面して、すぐ、ずっと工業地域ということは適當ではない。その時分は何もなかったから、まあ、そういうふうになったかもしれないけれども、適當ではないということで、すぐ是正方をやりまして、普通、大体30メートル離して住宅地域を緩衝地帯をとっているわけであります。理研の脇なども、そうでございます。あれも、あのように変えるには、大変な努力をして変えたわけです。悪田の場合においては、風もありますし、50メートルという住宅地域の線を出しておるわけです。それから、さらに奥に工場を建てるということに相なるわけでございます。まあ私は、学校の環境というものも大切でございます。しかし、当市の産業開発もまた大事でございます。そこで、あそこの臨海工業地域の人たちに、なぜ田塚にもあるのに、ああいう方面にまとまるように勧奨しないか、というお話でございます。第1の候補地としては、あそこをあげたのでございます。それから理研の裏、発電所、変電所がございまして、西中通地域でございます。この辺もいいじゃないかということで、第2候補地にあげておいたわけでございます。用地が幾らなのか、地主さんに当たってみない話でございます。工業が立地をする場合には、やはり採算点もございまして、それから、荒浜の地域もどうだろうというふうに言っておったわけであります。実は、あそこの悪田は、まあ、いまのところ成功はいたしておりませんけれども、将来は木工団地をつくりたいというようなことも言っておったわけでございます。そこで、あそこのあれは、理研系列の方が多いのでございます。あそこの雇用関係から、どうしても海岸線の方が…どうしても通勤は海岸線だということです。そこで、雇用の関係、それから降雪の関係、いろいろございますが、ぜひひとつ、あそこは準工業地域になっている。あそこは、われわれが合理化できて、集団化ができるように、市のほうからあつせんをしていただきたいということで、いろいろ、そういう点では、ほかにもあるわけでございますから、何も、そこでなければならないということではないと、おすすめたのですが、雇用の問題ということになると、これが一番、企業としては切ないところでございます。そこで、それでは、やむなく、そちらから通って来られる方がほとんどであるということなので、ごあつせん願いたいということで、ごあつせん申し上げたわけです。同時に公害の問題でございます。これはもちろん、そういう団地ができる場所、レイ・アウト等については、十分、私どものほうでも指導を申し上げてまいりたいと思います。また、県には公害課もあるわけでございます。鶴巻課長あたりのご指導もいただきながら、こうした面での環境をよごすことのないように、公害が出ないように万全の措置をとってもらうように、組合長並びに専務には私のほうからもお願いをいたしております。幸い、専務さんも非常な学識者でもありますし、その辺は信頼しておるわけであります。公害防止の施設等に

対する融資のあっせん等については、公害を除去するための設備については、特別な融資制度もあるわけであります。その辺は十分、われわれも意を用いて努力いたしますから、どうかひとつ、産業も栄え、そして学校の環境においても、りっぱな教育ができるように、この辺は両々相またなければなるまい、こんなふうに考えておるわけでございます。

それから柳橋踏切でございますが、この重要性については十分承知をいたしておるわけでございます。まあ、先ほど、三条のお話も出たわけでございます。それで、この踏切というのは都市計画道路になっておるわけです。ご案内のとおり都市計画というのは、道路改良に比べると、おそうございます。私は一般論を申し上げておるわけですが。そこで、三条の大崎、あんな所にできたではないかというお話でございますけれども、道路改良でやれる場合と、道路改良でやれない場合とございます。人口密集地域と隣接して疎密の地帯があるならば、この辺は総理府あたりに、そういう調べとか届け出がいつておるわけございまして、そういう所については道路改良費を入れることができる。このようになっておるようでございます。そういう点で、三条は道路改良でおやりになったのではないかと思います。私のほうでも鯨波の立体交差がございます。あの辺は本年と明年の2カ年で、あその立体交差が十分できる。これは黒部―柏崎線という県道になりまして、道路改良でやるわけでございます。こういう所は、そういう点では、人口密集地域ではございません。しかも、あれは県道で、都市計画の指定がない所でございます。柳橋になりますと、そういう点が非常にむずかしいのでございます。しかも、踏切の東側は駅構内、西のほうは構外になります。この辺は鉄道関係との連絡協調もあるわけであります。ああいうものに対して市長は無責任ではないかと、おっしゃるわけでございますが、私は2年以来、夜が夜中でも、この問題については皆さんと対話をいたしておる次第でございます。私、残念なのは、はたで見えておって、それができなければ、「何だ。市長は何をやっているんだ。」こういうご激励をいただく方々がたくさんございます。しかし、それをやってゆくためには、その住民個々の方々に承認をいただかなければなりません。しかも、立体交差をされるずっと先の方々、枇杷島の先や黒姫や、こちらの本町通りの方々は、立体交差をやれば、便利になるわけでありましょう。しかし、立体交差をされる、その下になる地域の方々は、ほんとうにお気の毒でございます。このお気の毒な方々をどのように生かしてゆくように努力しなければならぬかということも、また市長の責任であろうと思います。そういう点で、あその地域は、脇に自動車道路をつくれ、しかも、計画によれば18メートルぐらいになろうかと思います。あるいは22メートルになるかもわかりません。その上、さらに旧道には自動車が通るような隧道を掘れと、こういうのです。そうすれば、その間の方々も、ある程度、不便が解消されるわけであろうと思います。しかし、理屈からいって、そういう所は車を通せないから、何億もかけて立体交差をするわけです。そこにまた、自動車の通るようなものをやれといっても、無理であります。ですから、あそこには人道歩道橋を、どうしても、国がやらない、県がやらないならば、市が責任をもってやりましょう。こう申し上げておるわけであります。ところが、やはり、これでは不便だ。やはりオートバイ



や自転車、あるいは救急車ぐらい通れるようにしてほしいというのが、あの地域の方々の要望でございます。この辺については、私も、これが実現できますように、都市計画課長には、これは何とかしてそういう隧道にしてもらいたい。しかし、そこに自動車が行き違いのできるような道路まで隧道をつくってくれなどとは言えません。そのために立体交差をやるのですから、しかし、ある程度、救急車ぐらいは通れるようにしてほしい。そのために市が負担をしなければならないのであるならば、私のほうでは負担をする決意でございます。こう言っておるわけです。そして、そういう決意や話を、あそこの人たちにいろいろお話申し上げておるわけです。まあ私は、あえて、こういう公式の議場で、あそこの方々の内容までは申されません。私も人間でございます。これだけの努力をしておって、「お前、だれが一体、立体交差を頼んだんだ。何のためにおれの所に来たんだ」などと言われれば、いかに、民主政治は忍耐の政治である。時間をかけれ、と申しましても、やはり人間というものは感情がございます。感情もまた、ときによって必要だと思います。しかし、私は、この問題は、何とかして一刻も早く解決をしなければならない問題だということで、まあ、ここに地元の議員さんもおられますけれども、ともに手をとって、そうして、法線決定をする前に、ひとつ県からもいろいろお話を願って、この法線でよろしいと言う前に、関係者の起工承諾書ぐらいは1つ1つ判をもらっておくぐらいの手だてをさせてもらいたい、私はこう思っております。しかし、その手だてをする段階にまだ立ち至っておらないことも事実でございます。これは私は、地元の空気というものは、ある程度まとまっていると思いますが、今後は県の段階でいまだ少し時間を貸していただかなければならないと思っております。見通しといたしましては、12月いっぱいぐらいには、何とか、そういう法線について……これは本省の意向も聞かなければなりません。2億や3億でできるものではございません。

都市計画は、ご案内のとおり、新潟県の43年度の都市計画は、対42年比0.2パーセントの増でございます。しかるに、柏崎の都市計画においては20パーセントの増を示しているのです。それでも、都市計画については非常に不満だ。市長は何をやっている。こういうお声があるようでございます。この辺は対話の不足であろうと、私はみずから反省をいたしております。ほうぼうから柳橋立体交差、都市計画についてはご不満もあるようでございますので、この機会をかりて、私はある程度申し上げておきたいと思っております。そういう事情でございますので、どうかひとつ起工等ができますように、具体的に進みますように、皆さんの格別なるご協力、ご援助のほどをお願いを申し上げる次第でございます。

それから、無雪道路につきましては、お説のように、新潟県が後進地域を脱却するためには無雪道路をつくることである。この辺ができれば、格差というものは、ある程度縮小されることは論をまちません。しかし、これにも段階があります。新潟県市長会では、本年度、特に最重点事業として、この豪雪の克服をどのようにしてやるかということで、従来ずっと新潟市長を中心にいたしまして、十日町、新井、高田……まあ、いろいろと、われわれもお手伝いをしているわけですが、こうやって委員会もつくってやっておるわけです。きのうも市長会がございまして、もっぱ

ら、このことに論議が集中し、具体的な話し合いをしているわけです。

一番大事なことは、資料の収集でございます。行政を相手にいたしまして、政治論だけで物事が解決できるものではございません。やはり、政治論は政治論でありますが、それを裏付けるための資料がなければ、国民全体の納得は得られないわけでありまして。荒船事件だって、そうであります。結果的に見れば、あそこの連中は、ああやって自分の開発されない所に急行がとまるならば、地域格差を是正する意義があるはずであります。だけど、やはり、国民の指弾を受ける、こういうことになる。それには1つのやはり過程が必要でございます。私は、そういう意味で、積雪連合というもののあの資料は、先般なくなられた古川さんあたりのご努力というものは、たいへんでございます。そうやって、どうやら新潟県の除雪というものの、また国全体としても除雪の問題は逐次向上してきておるわけでございます。

新潟県の除雪機械は、約100市町村ある中で、わずか、除雪機械というのは、年間5～6台しか配当になってきておりません。5～6台に対して、なかなか、順番を待っておったのでは、何十年もかかります。柏崎市は、これで2台目でございます、除雪機械をいれるのは。これは、ことし、無理をして、建設省の機械課長と談判をしておったわけでございます。「あんたの所は前に1台やってある。まだ、みんなに行き渡らんじゃないか。」ということで、全然、相手にしないわけです。いろいろ、この辺も理屈をこねて、理屈をつけて、役所が許可できるような、そういう体制に持っていったお願いしているわけでございます。ですから、私のほうは、ことし、また1台来たわけです。私は、市長会等で、「年間5～6台しか来ないものに、しかも、1台やった所はあとまわしなどと言われておったのでは、どうにもならないではないか。」という議論が強硬に出ましたときに、私は、自分の所さえよければいいなどとは思っておりません。ああ、これは悪かったなあと。しかも、これは、豪雪地帯のグレーダーがこちらにまわってきたわけです。そういう点で、いかに自分の地域をよくしようと思ひましても、それには1つの限度、お互いの常識というものがあろうかと思ひます。しかし、私は、いろいろの事情を申し上げて、そういうような除雪機械の導入をはかってきておるわけでございますので、昨年よりもことしの除雪はさらに進展をするであろう、このように考えておるわけでございます。そういう点で、一挙には解決できませんけれども、こうやって、みんなが努力していかなければならない。

それから、除雪のバック・グラウンドがどうも貧弱ではないか、こういうことでございます。この辺はひとつ産業界、商工会議所あたりで、業界としても自主的に……全部、市長まかせということではなくて、ひとつ、そういう方面からも積極的なバック・アップ……いままでも、やってもらっています。決して、やってもらっていないというわけではない。補償などというような問題は商工会議所の赤沢君なんかはアゴを出しています。一生懸命やってくれていますが、なお不足の場合については、いろいろ町内のご協力……柏崎のバック・グラウンドに対しては、本町通りなどは自費で、町内費を積み立てて、そして、捨てる費用は町内の金でやってくれているのです。農村に行けば、「おらほうも除雪してくれ。」ごもっともです。

「本町通りだけ、どうしてきれいにするのか。われわれも税金を納めている。」こ

ういう声があがります。そういうとき、本町通りはみずから毎月積み立てをして、除雪というものはみずからの手で行なっている、こういう説明を申し上げますと、「なるほど、そうだったのか」というあたりで、ご納得をいただいております。

私は、地域格差の是正は豪雪対策からと、このあたりが身近な点であり、また、効果があがるものだと考えております。

アメリカシロヒトリについては、農村関係は共同防除でやっておりますので、部落ごとに共同してやっておりますので、大体、成績はあがっているように思います。問題は市街地です。これも昨年度は衛生課でやっておったものをことしから農村課に移したわけです。ただ、考え方のPRが不足しておったようであります。広報ぐらい出しても、なかなかダメだ。このあたり、自分の庭にある木にシロヒトリがついている。市役所が来て防除してくださいと言われても、大型の防除機を一々持って行ってやったら、今度は池の中に染が入って、コイが死んだとか、金魚が死んだとかという問題が起きるわけでございます。これは、やはり、みずからが、自分の庭であり、自分の木というもののについての管理は、みずからが行なわなければならないという、そういう自主的な行動の上に立つてこそ、はじめて、われわれが応援ができる、こういう体制になろうかと思えます。この辺は、住民に対するお願い、理解、協力のPRと申しましょうか、啓蒙が不足しておったというあたり、反省をしております、この辺、明年度、ひとつ十分な対策ができますように、担当課にも申しつけておるわけでございます。

以上でございます。

◎議長（佐藤平一郎君）

2番。

〔2番与口登美夫君登壇〕

◎2番（与口登美夫君）

たいへん、熱を入れてご答弁していただきまして、小会派の意見を見ないあたりは、たいへん心がけがいいと思って、喜んで聞いておりました。

原子力発電については、新聞社の間違いであるということについては十分理解ができました。それから、安政町の団地についても、市長のご答弁では、公害が起きないということをお約束をしておるようではありますが、私も工場にあって一介の職工であります。海にまみれて仕事をしておるものでありますが、先に工場ができておって、後ほど来ても、公害というものは起きる危険性がある。その防止すらも、きゅうきゅうとして、われわれが悩んでいるというのが実態であります。そういう中で、事前に起きそうではないかということが、きわめて危険だろうというふうに私は考えております。そういう意味で、60メートル離れるから大丈夫だろうとおっしゃいますけれども、かなり、粉塵とか騒音などは、60メートルぐらいでは、それは工場の規模にもよりますけれども、ちょっと防止できないのではないかと。防止するには、かなりの防音設備とか粉塵の除塵装置等に、かなり高額な費用を要するだろうと考えております。それをあえて金をかけなければ問題が出てくるでしょうし、かけてまでやるということになれば、適地を求めて指導したほう

が、より適切ではなかったろうかと考えておるわけでありますけれども、市長は先ほど、そういう設備をされて、公害が起きないようにするというご答弁でありますから、まあ、おまかせをしたいと思うわけであります。

柳橋の踏切につきましては、非常にむずかしいところまで答弁がまいて、道路の性格なり、そういう点にも触れられまして、また、いままで努力をしてこられた経過等についてご説明をいただきまして、わかりましたけれども、努力は努力で、大いにわれわれは、以前から市長が努力をしておられるということは十分承知の上で、しゃべっておるわけで、結果として、できないということについて、非常にやはり、努力のいかにかわらず、こういう問題は、できるか、できないかというところで効果というものの評価のし方が違ってくるわけです。たいして努力しないでも、できるものもある。そういう意味で、あえて苦言を呈しているわけです。お許しを願いたいと思うのですが、ご努力を願いたいと思います。

無雪道路についても、努力のほどをお聞きしたわけですが、いたずらにバック・グラウンドに頼るということではなくて、私が特に強調したい点は、機械力と合わせて、市費の中で何とかして面倒を見るという余裕をつくるのが、柏崎の将来については、かなり発展させる要因になるという意味で申し上げたつもりであります。

最後に、アメリカシロヒトリについては、何か、自分で自分の庭を管理すれば事足りるというふうに受け取れたんですけれども、それ以上に被害は大きいと判断しておるわけでありますので、よろしく明年度においては対策を練っていただきたいと思うわけであります。

議場でお互いに論議をやる場合に、議論を左右するだけでなく、ここで発言したことは、お互いに約束をして帰るわけであります。発言し、約束したことについては、それをカガミとし、次回の議会、あるいは明年の議会までに姿勢を正してご報告できるということが、お互いに選ばれてきた人間の使命であります。よろしくお願いいたします。

◎議長（佐藤平一郎君）

この際暫時休憩いたします。

午後 3 時 1 分 休憩